



えと文
上野富二郎

夏の、よく茂った樹の姿もいいが、冬の裸の樹も劣らず美しい。それは外見的な美しさに加えて、樹のほんとうの姿を見る思いがするからだ。この冬などはずいぶんと寒かったらうに、一向にこたえる風もなく、寒空に向かつていっばいに、手を広げている様子が美しく立派に見える。

この絵は、校庭の隅の古い樹なのだが、一つの株から二本が立ち上がり、寄りそっている姿が何ともユーモラスでほほえましい。それにしても、ずっと昔には囲りに仲間の樹たちがたくさん立っていたと思うのだが、次々に切られて今はこれ一株になってしまった。その淋しさと怒りとを空に向かつて吠え叫んでいるようにも見える。

(女子中・高教諭・美術)